

スクミリンゴガイの発生が拡大しています。

－発生状況を確認し、防除対策を徹底しましょう！－

1 発生状況等

スクミリンゴガイ（俗称：ジャンボタニシ）（写真1～3）は、淡水棲の巻貝で、生育初期のイネ等を食害し、移植直後の苗が食害されると欠株となる場合があります。近年、県南部の足利市、小山市、野木町で本貝の発生を確認していましたが、令和7（2025）年6月に、新たに栃木市（西方町）でも発生が確認されました。

今後、更なる発生地域の拡大や、被害の発生が懸念されます。被害を防ぐため、また、ほ場をよく確認し、早期発見・早期防除に努めましょう。



写真1 イネを食害する
スクミリンゴガイ



写真2 イネに産付けられた
卵塊



写真3 他のタニシ類との比較

2 防除対策

○移植前

- (1) 取水口・排水口にネットや金網を設置し、本貝の侵入を防止する。
- (2) 水路の壁等に産み付けられた卵塊を殺卵する。

○移植時・移植後

- (1) 浅水管理により摂食行動を抑制する（水深を4cm（理想は1cm）以下に維持）。
- (2) 貝や卵塊は見つけ次第捕殺する。
- (3) 表1を参考に薬剤散布を行う。

○収穫後・冬期

- (1) 厳寒期前の耕うんにより本貝を物理的に破壊するとともに寒風にさらす。
- (2) 本貝の移出入を防ぐため、トラクターの爪やアタッチメント等を洗浄する。

3 注意事項

- (1) 本貝が水田や用水路等に侵入すると根絶は非常に困難であるため、除草を目的とする放飼等、未発生地域への人為的な持ち込みは行わないこと。
- (2) 本貝には人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）がいる場合があります、卵にはPV2という神経毒が含まれるため、素手では扱わず、ゴム手袋やゴミ拾い用トングなどを使用する。素手で触った場合には、石けんでよく手を洗浄する。
- (3) 詳細は[スクミリンゴガイ防除対策マニュアル（移植水稻）](#)（農林水産省消費・安全局植防課）等を参照。

表1 スクミリンゴガイの主な防除薬剤（令和7（2025）年6月19日現在）

農薬の名称	農薬の種類	使用方法	希釈倍数	使用時期	使用回数
スクミノン	メタアルデヒド 粒剤	散布又は無人航 空機による散布	1～4kg/10a	収穫 60 日前まで	2 回以内
スクミンベイト3	燐酸第二鉄粒剤	散布	2～8kg/10a	発生時	－
スクミンブルー	燐酸第二鉄粒剤	散布	2～8kg/10a	発生時	－

注1：必ず農薬容器のラベルをよく読み、使用方法・使用上の注意事項を守る。

詳細は、農業総合研究センター 防除課（Tel. 028-665-1244）までお問合せ下さい。
 病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi_nousei)」、
 農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）
 でもご覧いただけます。



～栃木県からのお知らせです～

6月～8月は、「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。



- ① 安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ② いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使しましょう！
- ③ 農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！
- ④ 周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう！
- ⑤ 農薬散布のその後に！ 防除器具の洗浄も欠かさずに行いましょう！



農作業中の熱中症に注意しましょう

- ・こまめな休憩、水分・塩分補給を行いましょ
- ・単独作業は避け、一人作業の場合は携帯電話を持ちましょ
- ・体調不良を感じたら、すぐに作業を中断し、涼しいところで休みましょ



イチゴ炭疽病を防ぐため、育病期からの管理を徹底しましょう！

イチゴ炭疽病は、主に育苗期に高温多湿の条件下で発病が増加します。本病は苗不足や本ぼでの枯死株発生を引き起こすため、いちご栽培における重要病害です。

7月の巡回調査の結果、一部のほ場で本病の発生が確認されました。

また、気象庁の1か月予報（7月10日発表）によると、向こう1か月の平均気温は高い見込みであり、本病の発生に好適な条件のため、今後の発生増加が懸念されます。

感染した株は防除による回復が困難なため、予防を中心とした対策を行いましょ

1 被害症状

- ・葉に直径 2～3 mm の薄墨色の丸い斑点が生じる（写真1）。
- ・ランナーや葉柄に黒色で陥没した紡錘形の病斑を生じ（写真2）、進展すると折損する。さらに多湿条件では鮭肉色の孢子塊を形成する（写真3）。
- ・クラウンにまで進展すると、クラウンの外側から内側にむけて褐変し（写真4）、最終的には株が萎凋、枯死する。

2 伝染方法

- ・伝染源は潜在感染した（病原菌が感染しているが症状を示さない）親株や、土中に残った前作の被害残さ、親株・育苗に使用する各種資材である。これらに形成された孢子が降雨や頭上かん水による水滴のはね上がりにより飛散し、伝染する。



写真1 薄墨色の丸い斑点(葉)



写真2 陥没した病斑(葉柄)



写真3 病斑上の鮭肉色の孢子塊



写真4 クラウンの褐変

3 防除対策

- (1) 胞子の飛散を防ぐため、点滴チューブの使用等、水のはね返りのない方法でかん水する。
- (2) 葉の濡れ時間が長いほど発病しやすいため、かん水は午前中に行い、夕方までに葉が乾いた状態になるよう、かん水の時間や量を調節する。
- (3) 発生前から薬剤を定期的に予防散布する（表1）。
- (4) 薬剤抵抗性の発達が見られるため、薬剤選定の際には、イチゴ炭疽病薬剤感受性検定結果を参照する。
- (5) 発病株は早急に抜き取ってほ場外へ持ち出し、嫌氣的発酵処理※後に処分する。

※罹病残さを肥料袋等に詰め、残渣重の半分の水を添加し、袋内の空気を抜いて密閉し日当たりのよい野外に放置する

- (6) 発病株の周辺株は、潜在感染のおそれがあるため、定植苗として使用しない。また、感染拡大防止のための重点的な薬剤散布を行う。
- (7) 窒素肥料を多用すると発病しやすいため、適正な施肥を行う。
- (8) 定植前に本ぼの土壤消毒を行う。

※詳細は病害虫防除対策のポイント No.21 イチゴ炭疽病を参照。

表1 イチゴ炭疽病に登録のある主な薬剤(令和7年(2025)年7月15日現在)

薬剤名	希釈倍数(倍)	使用時期	本剤の使用回数	FRACコード	有効成分	有効成分の総使用回数
キノンドーフロアブル	500~800	育苗期	3回以内	M1	有機銅	3回以内
ベルコートフロアブル	1000	育苗期(定植前)	5回以内	M7	イミノクタジンアルベシル酸塩	10回以内 ¹⁾
ファンベル顆粒水和剤	1000	収穫前日まで	3回以内	M7	イミノクタジンアルベシル酸塩	10回以内 ¹⁾
				11	ピリベンカルブ	3回以内
サンリット水和剤	2000	収穫前日まで	3回以内	3	シメコナゾール	3回以内
セイビアーフロアブル20	1000	収穫前日まで	3回以内	12	フルジオキシニル	3回以内
タフパール	2000~4000	育苗期~収穫前日まで	-	BM2	タラロマイセス フラバス	-

1)育苗期は5回以内、本ぼでは5回以内。

詳細は、農業総合研究センター 防除課 (TEL 028-665-1244) までお問合せ下さい。
 病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi_nousei)」、
[農業総合研究センターホームページ](#)でもご覧いただけます。



~栃木県からのお知らせです~ **6月~8月は、「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。**

- ① 安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ② いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！
- ③ 農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！
- ④ 周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう！
- ⑤ 農薬散布のその後に！ 防除器具の洗浄も欠かさずに行いましょう！

りんごの斑点落葉病と褐斑病の発生増加に注意しましょう！

7月の巡回調査の結果、斑点落葉病及び褐斑病の発生が、平年よりも多く確認されました（図1、2）。

気象庁発表の1か月予報（7月24日発表）によると、今後1か月の平均気温は高くなる見込みであり、本病に好適な条件が続くと予想されることから、発生増加が懸念されます。

これらの病害が多発すると、早期の落葉を引き起こし、果実の品質低下や収量の減少につながるおそれがあります。発生状況をよく観察し、適切な防除を行いましょう。

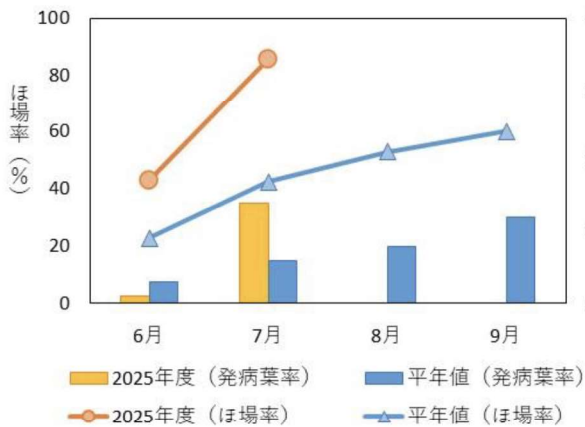


図1 斑点落葉病の発生推移

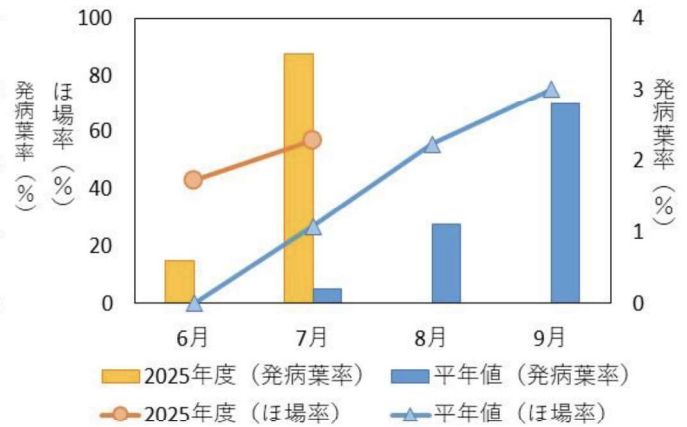


図2 褐斑病の発生推移

1 症状

- (1) 両病害とも、発病初期は葉に2～3mmの褐色から暗褐色の円形病斑を生じる。（写真1）。初期病斑はよく似ているが、**褐斑病は病斑上に虫糞状の小黑点（分生子層）**を形成する（写真2）。
- (2) 斑点落葉病は、病徴が進展すると**大型の不整形病斑**となり（写真3）、激発すると早期落葉する。果実では、褐色～黒色の円形病斑が発生する。
- (3) 褐斑病は、病徴が進展すると褐色の不整形病斑となるが、**病斑部の周辺はしばらく葉色を残し、健全全部は黄化**する（写真4）。



写真1 斑点落葉病の初期病斑



写真2 褐斑病の病斑上の小黑点



写真3 斑点落葉病の不整形病斑



写真4 褐斑病の黄化症状

2 防除対策

- (1) 予防効果の高い薬剤を中心に計画的な薬剤散布を行う。病害の発生が確認された場合は、治療効果の高い薬剤を使用する（表1）。
- (2) 殺菌剤耐性菌の発生を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

表1 リンゴ斑点落葉病及びリンゴ褐斑病に登録のある主な薬剤（令和7（2025）年7月10日現在）

薬剤名	適用病害名	使用時期	希釈倍数 (倍)	本剤の 使用回数	有効成分	FRAC コード	効果
ICボルドー412	斑点落葉病	-	20~50	-	塩基性硫酸銅	M1	
	褐斑病		30~50				
キノンドーフロアブル	斑点落葉病	収穫14日前まで	800~1000	4回以内	有機銅	M1	予防
	褐斑病						
オーソサイド水和剤80	斑点落葉病	収穫前日まで	600~800	6回以内	キャプタン	M4	
	褐斑病						
スコア顆粒水和剤	斑点落葉病	収穫14日前まで	3000	3回以内	ジフェノコナゾール	3	
	褐斑病		2000~3000				
フルーツセイバー	斑点落葉病	収穫前日まで	1500~2000	3回以内	ペンチオピラド	7	
	褐斑病						
ファンタジスタ顆粒水和剤	斑点落葉病	収穫前日まで	3000~4000	3回以内	ピリベンカルブ	11	治療
	褐斑病						
ナリアWDG	斑点落葉病	収穫前日まで	2000	3回以内	ピラクロストロビン ボスカリド	7・11	
	褐斑病						
ポリオキシシンAL水和剤	斑点落葉病	収穫3日前まで	1000	3回以内	ポリオキシシン複合体	19	
	褐斑病						

注：RACコード3、7、11は耐性菌発生防止のため、あわせて2回以内の使用とする。

詳細は、防除課（Tel. 028-665-1244）までお問合せ下さい。
 病害虫情報発表のお知らせは「[農業総合研究センターホームページ](#)」、
 「[栃木県農政部 X](#)」でご覧いただけます。



【センターHP】

～栃木県からのお知らせです～ **6月～8月は、「栃木県農業危害防止運動」の実施期間です。**

① 安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！ ② いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！
 ③ 農薬散布のその前に！ 風量や风向きに注意して、飛散防止に努めましょう！ ④ 周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう！
 ⑤ 農薬散布のその後に！ 防除器具の洗浄も欠かさずに行いましょう！

果樹類のハダニ類が多いため早期発見、防除に努めましょう！

7月のなしの巡回調査の結果、ハダニ類の発生ほ場率は19.2%と、平年の約3倍（平年比291%）に達しており、非常に多い状況です。

気象庁の1か月予報によると（7月24日発表）、今後1か月の平均気温は平年より高い見込みです。このため、ハダニ類の増殖や活動に好適な条件が続くと予想され、なし、りんご等の果樹類において、発生が増加することが懸念されます。

ハダニ類の発生状況をこまめに確認し、早期発見、早期防除に努めましょう。

1 防除対策と注意点

- (1) 多発すると密度の抑制が困難になるため、写真1、2を参考にして、**早期発見・早期防除**に努める（表1）。なお、防除の目安は、**1葉当たり成虫数が、なしでは1～2頭、りんごでは3頭**である。
- (2) 殺ダニ剤を散布する際、**散布ムラが生じないように、十分な薬液量で丁寧**に散布する。スピードスプレーヤーを使用する場合は、園地外周部等に散布ムラが生じないように特に注意する。
- (3) **気門封鎖剤は虫体に直接かかるように十分な薬液量で散布**する。また、数日間隔で複数回散布することで孵化幼虫を防除したり、殺卵効果のある薬剤を併用したりすることで防除効果を高めることができる。
- (4) **殺ダニ剤散布直後の除草は控える**（下草のハダニ類が樹上に移動するため）。
- (5) ハダニ類に対する天敵を利用している園地では、天敵に影響する薬剤の使用を控える。
- (6) 他害虫の防除にピレスロイド系やネオニコチノイド系等の殺虫剤を連用すると、天敵が減少し、ハダニ類の発生が増加するため注意する。

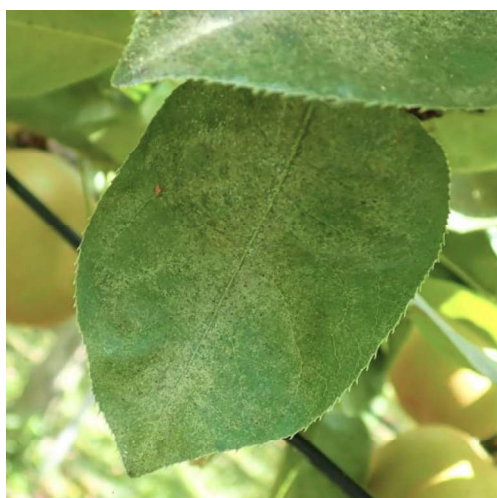


写真1 ハダニ類による被害（葉のかすり症状）



写真2 ハダニ類

表1 なし・りんごのハダニ類に登録のある主な薬剤（令和7（2025）年7月10日現在）

IRAC コード 注1	農薬名	登録の有無		希釈倍数	使用時期	本剤の 使用 回数	農業の系統
		なし	りんご				
6	コロマイト水和剤	○	○	2000倍	収穫前日まで	1回	マクロライド
20(B)	カネマイトフロアブル	○	○ 注2	1000～ 1500倍	注3	1回	アセキノシル
20(D)	マイトコーネフロアブル	○	○ 注2	1000～ 1500倍	収穫前日まで	1回	ビフェナゼート
23	エコマイト顆粒水和剤	○	○	2000倍	注4	1回	環状ケトエノール
25B	ダニコングフロアブル	○	○	2000倍	収穫前日まで	1回	カルボキサニリド
33	ダニオーテフロアブル 注5	○	○	注6	収穫前日まで	1回	アシノナピル
未分類	アカリタッチ乳剤	○ 注7	○	1000～ 3000倍	収穫前日まで	—	脂肪酸（気門封鎖）
	ムシラップ	○ 注8	○ 注8	500倍	収穫前日まで	—	その他（気門封鎖）
	粘着くん水和剤	○ 注9	○ 注9	500倍	収穫前日まで	—	その他（気門封鎖）

注1：薬剤感受性の低下を防ぐため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布すること

注2：りんごの適用病害虫名は「ナミハダニ」の内容を記載

注3：なしでは「収穫前日まで」、りんごでは「収穫7日前まで」

注4：なしでは「収穫14日前まで」、りんごでは「収穫前日まで」

注5：銅剤との混用及び近接散布は避けること

注6：なしでは2000倍、りんごでは1000～2000倍

注7：果樹類（りんごを除く）

注8：果樹類

注9：果樹類（かんきつを除く）

※ 詳細は、「[栃木県農作物等病害虫雑草防除指針](#)」を参照。

詳細は、防除課（TEL028-665-1244）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「[農業総合研究センターホームページ](#)」、
「[栃木県農政部 X](#)」でご覧いただけます。



【センターHP】

農作業中の熱中症に注意しましょう

- ・こまめな休憩、水分・塩分補給を行いましょ
- ・単独作業は避け、一人作業の場合は携帯電話を持ちましょ
- ・体調不良を感じたら、すぐに作業を中断し、涼しいところで休みましょ

～栃木県からのお知らせです～

6月～8月は、「**栃木県農薬危害防止運動**」の実施期間です。



- ① 安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！ ② いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょ！
- ③ 農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょ！ ④ 周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょ！
- ⑤ 農薬散布のその後に！ 防除器具の洗浄も欠かさずに行いましょ！

ハスモンヨトウ、オオタバコガの発生が多いため

早期発見、早期防除に努めましょう！

ハスモンヨトウとオオタバコガのフェロモントラップによる総誘殺数（7月第4半旬まで）は、ハスモンヨトウでは県内10地点の内7地点、オオタバコガでは、県内7地点の内6地点で平年より多い状況です。

気象庁の1か月予報によると（7月24日発表）、今後1か月の平均気温は平年より高い見込みです。今後も両種の増殖や活動に好適な条件が続くと予想され、発生の増加が懸念されます。

ハスモンヨトウとオオタバコガは、幼虫が大豆、野菜類（いちご、なす、トマト等）、花き類など幅広い農作物を食害する重要な害虫です。ほ場内の発生状況をこまめに確認し、早期発見、早期防除に努めましょう。

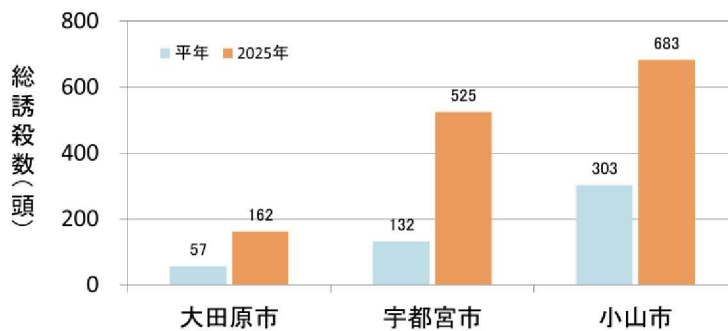


図1 ハスモンヨトウの総誘殺数*（6月第1半旬～7月第4半旬）の平年との比較

* 宇都宮市のみ4月第1半旬～7月第4半旬の総誘殺数。平年は、過去10年の平均値。

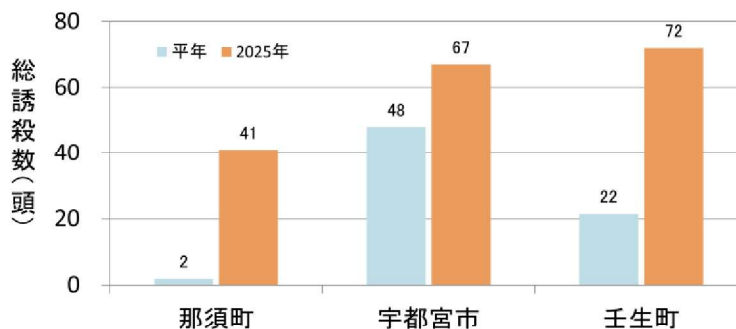


図2 オオタバコガの総誘殺数（6月第1半旬～7月第4半旬）の平年との比較

* 宇都宮市のみ4月第1半旬～7月第4半旬の総誘殺数。平年は、過去10年（壬生町は8年）の平均値。

2 防除対策

- ほ場内外の除草の徹底（雑草は生息場所となるため）。
- 施設栽培では、開口部に防虫ネットを設置。黄色灯や緑色灯の夜間点灯も被害抑制に有効。
- 被害の早期発見（幼虫の食害痕や虫糞を目安にほ場をよく観察する）。
- ほ場内からの除去、捕殺（ハスモンヨトウの卵塊や分散前の幼虫、オオタバコガの被害果実等は見つけ次第速やかに除去、老齢幼虫は捕殺）。
- 発生が確認された場合には、「[栃木県農作物等病害虫雑草防除指針](#)」を参考に、農薬登録情報をよく確認して防除。

3 注意点

- (1) 幼虫の齢期が進むと、ハスモンヨトウでは薬剤が効きにくくなり、オオタバコガでは茎や果実の内部に潜り薬剤がかかりにくくなるため、**若齢期の防除を徹底する**。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、**IRACコードの異なる薬剤のローテーション散布の実施**する。
- (3) オオタバコガでは、果実や花芽等の組織内部に食入した幼虫が多い場合は、**浸透性の高い薬剤を散布するか、浸透性を高める機能性展着剤を利用**する。また、摘芯や摘蕾及び摘果等により生じた残さに寄生している可能性があるため、残さはビニル等へ入れ、ほ場外に持ち出し、**発生源にならないよう適切に処分**する。
- (4) いちごではB T剤の防除効果が劣る場合があるため注意する。



写真1 ハスモンヨトウの卵塊



写真2 ハスモンヨトウの分散前の幼虫



写真3 ハスモンヨトウの幼虫



写真4 オオタバコガの卵



写真5 オオタバコガの幼虫

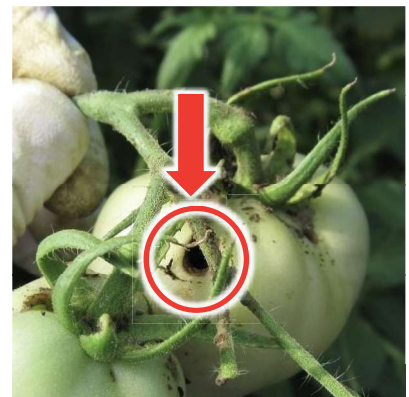


写真6 オオタバコガによるトマトへの食入

詳細は、防除課（Tel.028-665-1244）までお問合せ下さい。
 病害虫情報発表のお知らせは「[農業総合研究センターホームページ](#)」、
 「[栃木県農政部 X](#)」でご覧いただけます。



【センターHP】



農作業中の熱中症に注意しましょう

- ・こまめな休憩、水分・塩分補給を行いましょ
- ・単独作業は避け、一人作業の場合は携帯電話を持ちましょ
- ・体調不良を感じたら、すぐに作業を中断し、涼しいところで休みましょ



～栃木県からのお知らせです～

6月～8月は、「[栃木県農薬危害防止運動](#)」の実施期間です。



- ① 安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ② いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょ！
- ③ 農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょ！
- ④ 周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょ！
- ⑤ 農薬散布のその後に！ 防除器具の洗浄も欠かさずに行いましょ！

イネ縞葉枯病予防のため、箱施用剤で ヒメトビウンカを防除！

令和7(2025)年11月に採集したヒメトビウンカ越冬世代幼虫(写真1)のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、県平均で4.4%と、前年よりやや低下し、平年値(過去10年間の平均値5.4%)を下回りました(表1)。保毒虫率の年次変動の幅は少ない(表2)のですが、今年度も地点によっては防除の必要となる10%以上の地点があり、注意が必要です。なお、生息密度は13.6頭/10㎡で平年並でした。

本年作においても箱施用剤を活用した適切なヒメトビウンカ防除を実施し、縞葉枯病の発生を防ぎましょう。

表1 ヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率 (%)

地点名		年度		
		2023	2024	2025
県北部	大田原市蛭畑	4.2	2.1	2.1
	大田原市親園・実取	0.0	3.1	—
	那須烏山市滝田	0	1.0	0
	さくら市蒲須坂	6.3	8.3	—
	さくら市押上	—	—	3.3
	高根沢町花岡	3.1	11.1	11.5
県中部	真岡市横田	5.2	3.1	1.0
	宇都宮市横山	7.3	2.1	3.8
	宇都宮市雀宮	5.2	21.9	7.1
	上三川町上三川	14.6	6.3	2.3
	鹿沼市酒野谷	4.2	9.4	5.4
県南部	下野市小金井	5.2	2.1	13.5
	小山市小葉	3.1	3.1	—
	小山市石ノ上	4.2	2.1	1.0
	壬生町助谷	5.2	2.1	1.0
	栃木市惣社	5.2	0	6.8
	栃木市大平町真弓	4.2	11.5	1.0
	栃木市藤岡町富吉	1.1	5.6	12.5
	佐野市堀米	4.2	0	1.0
	足利市上洪垂	2.1	0	2.1
県北部平均		2.7	5.1	4.2
県中部平均		7.3	8.5	3.9
県南部平均		3.8	2.9	4.9
県平均		4.4	5.0	4.4

2025年度の検定サンプルは、11月中旬に、水田畦畔、休耕田のイネ科雑草、一部地域では再生稲から採取した。



写真1 ヒメトビウンカ幼虫



写真2 イネ縞葉枯病の黄化症状

表2 ヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移

年度	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
保毒虫率(%)	10.4	6.3	5.5	6.1	6.7	5.0	2.4	2.1	4.4	5.0	4.4

□防除対策

水稲の播種時から移植当日に箱施用剤（表3）を適切に使用し、ヒメトビウンカを防除する。特に、前年に縞葉枯病が多発した地域に作付する場合は防除を徹底する。また、他の水稲病害虫の発生状況も踏まえ、総合的に見て適切な薬剤を選定する。

表3 ウンカ類に登録のある主な箱施用剤（令和8（2026）年3月4日現在）

農薬名	使用量	使用方法	使用時期	本剤の使用回数	成分	農薬の系統	RACコード
●殺虫剤							
リディアNT箱粒剤	育苗箱 (30×60×3cm、使用土壌約5L) 1箱当り 50g	育苗箱の上から均一に散布する。	は種時(覆土前)～移植当日	1回	フルピリミン	その他	I:4F
フェルテラゼクサロン箱粒剤				1回	トリフルメゾピリム	その他	I:4E
					クロラントラニリプロール	ジアミド	I:28
ゼクサロンパディート箱粒剤				1回	トリフルメゾピリム	その他	I:4E
					シアントラニリプロール	ジアミド	I:28
●殺虫殺菌剤							
稲名人箱粒剤	育苗箱 (30×60×3cm、使用土壌約5L) 1箱当り 50g	育苗箱の上から均一に散布する。	は種時(覆土前)～移植当日	1回	オキサズスルフィル	スルフィル	I:37
防人箱粒剤						イソチアニル	その他(殺菌)
				1回	トリフルメゾピリム	その他	I:4E
					クロラントラニリプロール	ジアミド	I:28
					イソチアニル	その他(殺菌)	F:P03
スタウトダントツ箱粒剤				1回	クロチアニジン	ネオニコチノイド	I:4A
					イソチアニル	その他(殺菌)	F:P03
エパーゴルフオルテ箱粒剤				1回	イミダクロプリド	ネオニコチノイド	I:4A
					イソチアニル	その他(殺菌)	F:P03
					ペンフルフェン	SDHI	F:7
ルーチンアドスピノ箱粒剤	1回	イミダクロプリド	ネオニコチノイド	I:4A			
		スピノサド	スピノシン	I:5			
		イソチアニル	その他(殺菌)	F:P03			
ツインターボ箱粒剤08	1回	クロチアニジン	ネオニコチノイド	I:4A			
		イソチアニル	その他(殺菌)	F:P03			
Cs.オリゼリディアEV箱粒剤	1回	フルピリミン	ピリジリデン	I:4F			
		プロベナゾール	その他(殺菌)	F:P02			
		ペンフルフェン	SDHI	F:7			

詳細は、農業総合研究センター 防除課（Tel. 028-665-1244）までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせは「栃木県農政部 X(@tochigi_nousei)」、

農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>)

でもご覧いただけます。



果樹カメムシ類の越冬量が多いです！ 春以降の果樹園における被害発生に注意しましょう！

チャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシは、果樹カメムシ類の一種で、なし、りんご、うめ、もも等の様々な果樹の果実を吸汁加害する重要な害虫です。本年の発生量を予測するため、令和8(2026)年2月に県内全域で越冬状況調査を実施しました。

発生状況

○チャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの越冬量は昨年より多かった(図1、2)。
 ※ 県内102地点において、1地点当たり1m²(一部3m²)の落葉+表層土壌数cmの生存個体/m²を計数。

発生予測

- チャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの越冬量は昨年より多いため、春以降の発生量は昨年より多いと予想される。
- 気象庁の3か月予報(2月24日発表)によると、向こう3か月の平均気温は平年より高い予想であるため、果樹カメムシ類の活動は平年より早まると予想される。

防除対策

- 定期的な園地巡回を心がけ、早期発見、早期防除に努める。
- 適期に多目的防災網(4mm目合い以下)を展張する。
※なし及びりんごにおいては、人工授粉完了後速やかに展張する。
- フェロモントラップによるチャバネアオカメムシの誘殺数を4月以降に当センターホームページに掲載するため、防除の参考に御確認ください。

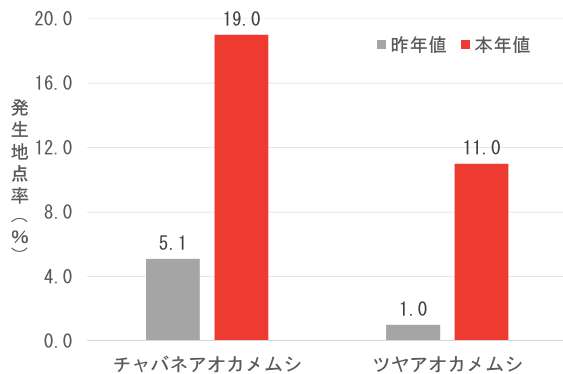


図1 発生地点率 (%)

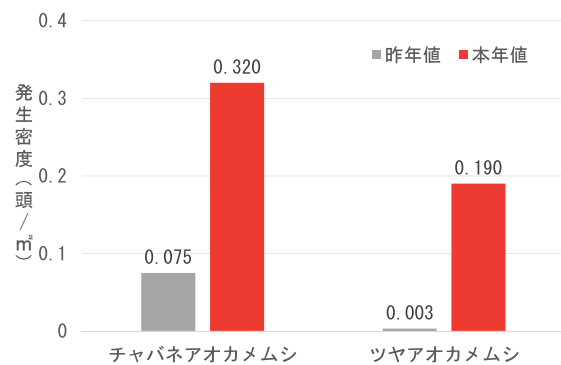


図2 発生密度 (頭/m²)



写真1

落葉下等で越冬中の
ツヤアオカメムシ成虫



写真2

チャバネアオカメムシの体色変化
 ※左：越冬時 右：活動時

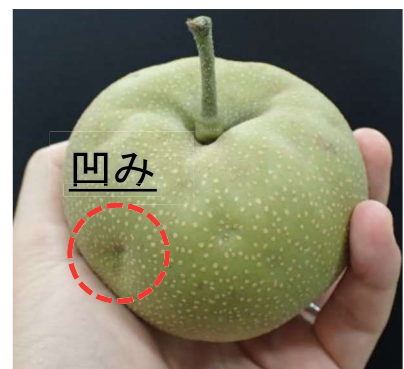


写真3

果樹カメムシ類による
なし被害果実

詳細は、農業総合研究センター (Tel 028-665-1244) までお問合せ下さい。

病虫害情報発表のお知らせは「[農政部X](#)」、[栃木県農業総合研究センターホームページ](#)でもご覧いただけます。また、[カメムシ防除作戦ホームページ](#)も御確認ください。



イネカメムシの越冬状況を確認しました！

[水稲における被害を防止するため適期防除の徹底に努めましょう]

イネカメムシは斑点米カメムシ類の一種で、稲の出穂期頃の加害で不稔を、乳熟期頃の加害で斑点米を生じさせる被害の大きな害虫です。今後の発生を予測するため、令和8(2026)年2月に県内全域で越冬状況調査を実施しました(写真1、2)。

発生状況

- 県全体では、昨年と比較し、やや少なかった(図1、2)。
- 地域別では、県南部から中部、東部の9市町で確認された(図3)。昨年と比較し、県南部では昨年よりやや少なかった一方、県中部では多かった(図1、2)。

発生予測と防除対策

- 越冬が確認された地域(図3:赤色■)では、今後の稲への被害が懸念されます。被害防止のため、出穂期頃と、その7~10日後(乳熟期頃)の2回、液剤等による防除を必ず実施しましょう。
- 越冬が確認されなかった地域(図3:黄色■及び白色□の市町)においても発生が懸念されます。常発地の県南部では引き続き適期防除を実施し、それ以外の地域においても、定期的にはほ場を確認し、早期発見・適期防除に努めましょう。

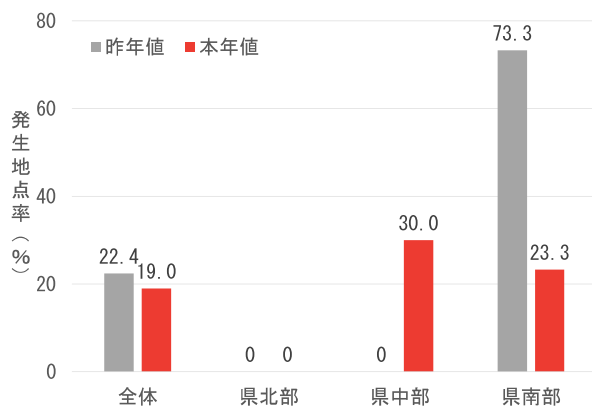


図1 発生地点率(%)

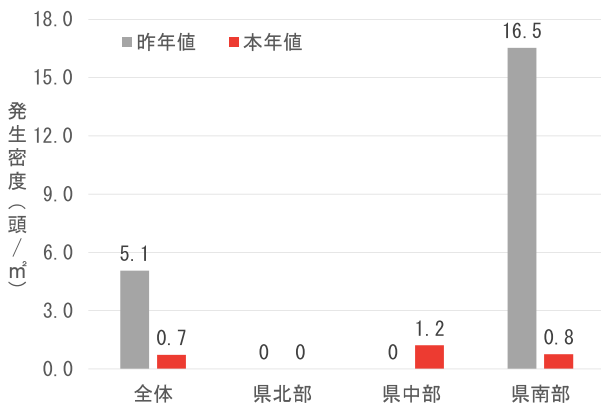


図2 発生密度(頭/m²)※

※ 1地点あたり1m²(一部3m²)の落葉+表層
土壌数cmの生存個体数/m²を計数

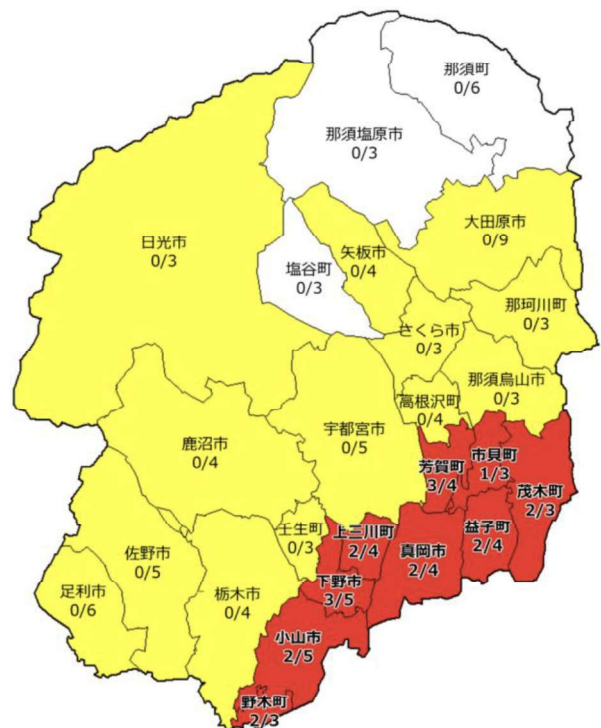


図3 越冬確認状況

- : 越冬が確認された市町
- : 越冬は確認されなかったが、前年の水稲ほ場等で発生を確認した市町
- ※ 図中の数字は、越冬確認地点数/調査地点数
25市町 102地点調査

具体的な防除方法

- 1 不稔防止対策として出穂期頃（1回目防除）と、斑点米防止対策として出穂期の7～10日後（乳熟初期頃）（2回目防除）に液剤等を散布して防除する（表1）。
その後、ほ場内で本種を含む斑点米カメムシ類が確認された場合は、斑点米防止のため、7～10日間隔で1～2回追加防除する。
- 2 各地域の防除組織と連携した地域一斉防除や、サービス事業者や個人によるドローン等を活用した薬剤散布を組み合わせることで、適期防除を実施する。併せて、発生予察情報を参考に、防除の準備を早めに行う。
- 3 イネカメムシは他県において薬剤抵抗性の発達が確認されているため、同一IRACコードの薬剤は連用を避け、異なるIRACコードの薬剤を組み合わせたローテーション散布を実施する。

表1 稲のカメムシ類に登録のある主な薬剤（令和8（2026）年3月4日現在）

農薬名	希釈倍数 又は使用量	使用時期	本剤の 使用回数	成分	農薬の系統	IRAC コード
スミチオン 乳剤	1000倍	収穫21日 前まで	2回以内	MEP	有機リン系	1B
キラップ フロアブル	1000～ 2000倍	収穫14日 前まで	2回以内	エチプロール	フェニルピ ラゾール	2B
キラップ 粒剤	3kg/10a		1回			
トレボン EW	1000倍	収穫14日 前まで	3回以内	エトフェンブ ロックス	ピレスロイ ド	3A
スタークル 液剤10	1000倍	収穫7日 前まで	3回以内	ジノテフラン	ネオニコチ ノイド	4A
ダントツ 水溶剤	4000倍	収穫7日 前まで	3回以内	クロチアニジ ン		
エクシード フロアブル	2000倍	収穫7日 前まで	3回以内	スルホキサフ ロール	スルホキシ イミン	4C

注1：IRACコードが同一のものは作用点が同じなので連用を避ける。

注2：斑点米カメムシ類の薬剤防除は、水田周辺のミツバチに影響を及ぼす可能性があるため、地域の養蜂家へ薬剤防除日を事前に周知する等の積極的な対応を行う。



写真1 成虫越冬の様子（左：落葉下、右：ジャノヒゲ内※） 写真2 越冬場所の例（雑木林）
※ 成虫は落葉下やジャノヒゲ内等で越冬する

詳細は、農業総合研究センター（TEL 028-665-1244）までお問合せ下さい。
病害虫情報発表のお知らせは「[農政部X](#)」、[栃木県農業総合研究センターホームページ](#)でも
ご覧いただけます。また、[カメムシ防除作戦ホームページ](#)も御確認ください。

農総研HP



カメムシ防除作戦HP



3 主要農作物病害虫の発生状況と原因解析（令和6（2024）年度確定）

1）普通作物

（1）水稲

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
苗立枯病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：少	4月中旬の育苗期における発生は少なかった。	適切な種子消毒や育苗管理により、発生は一部地域にとどまった。
葉いもち	平年：- 前年：-	平年：並 前年：やや多	6月下旬～7月上旬に県北部で多い発生であったが、7月中旬までは全般に平年並の発生であった。	6月中旬以降BLASTAMの感染好適条件が散発したが、6～7月は高温多照で推移し、上位葉への病徴進展は抑えられた。
穂いもち	平年：- 前年：-	平年：並 前年：やや多	県中部で少なく県南部でやや多い発生であった。	感染源となる葉いもちの発生がやや平年並で、8月は高温多雨であったため発生は平年並となった。
紋枯病	平年：- 前年：-	平年：やや多 前年：やや多	6～8月の発生は全般にやや多であったが、県中南部では7月中旬以降多い発生で上位葉鞘への垂直進展も見られた。	6～9月は高温で、8月は多雨であったため、垂直進展につながった。
ばか苗病	平年：- 前年：-	平年：並 前年：少	育苗箱での発生が一部で見られた。	適切な種子消毒や育苗管理により、発生は一部地域にとどまった。
もみ枯細菌病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：少	育苗箱での発生はほとんど見られなかった。	適切な種子消毒や育苗管理により、発生はごく一部にとどまった。
縞葉枯病	平年：- 前年：-	平年：並 前年：並	6～8月の発生は平年並であった。7月中旬までは県北部で平年より多く発生した。	ヒトビウンカ第1世代幼虫の保毒虫率は県平均で2.3%と平年値より低く前年より低下したが、県北部平均は1.6%と前年より上昇した。
稲こうじ病	平年：- 前年：-	平年：やや少 前年：並	県北部で発生が見られたが発病程度は軽く、平年よりやや少ない発生であった。	穂ばらみ期から出穂期にかけて、発病に好適な低温・多雨条件とならなかったため、感染が抑制された。
白葉枯病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：並	8月下旬に県中部の一部で発生が見られた。	6～7月の降水量は平年並から少なく推移した。
ごま葉枯病	平年：- 前年：-	平年：やや少 前年：並	8月下旬に県全域でやや少ない発生であった。一部に多発場が見られた。	8月の高温が発生を助長した。
黄萎病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：並	県北部・中部の一部ほ場で発生が見られた。	常発地においてツマグロヨコバイ保毒虫が生息していたと推察される。
苗立枯細菌病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：並	巡回調査での発生は見られなかった。	防除が適切に行われた。
ニカメイガ	平年：やや早い 前年：やや早い	平年：並 前年：並	フェロモントラップによるニカメイガの誘殺数は、地点によりばらつきはあったが、平年並であった。7月中旬の心枯茎の発生はやや多、8月下旬の白穂の発生は平年並であった。	春先の高温傾向により発生はやや早かった。
セジロウンカ	平年：- 前年：-	平年：やや少 前年：並	予察灯における誘殺は平年よりも少なかった。水田すくいとり調査では、7月は平年よりもやや多く、8月ではやや少なかった。	本県への飛来は少なかった。
トビロウンカ	平年：- 前年：-	平年：- 前年：-	予察灯における誘殺は見られなかった。	本県への飛来は少なかった。
ヒトビウンカ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	予察灯における総誘殺数は、平年よりやや少なかった。水田すくい取り調査の発生量は、7月上旬、8月上旬ともに平年並であった。	越冬世代の密度はやや少なかった。気温が平年よりもかなり高く推移したが、発生量は平年並で推移した。
ツマグロヨコバイ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや少	予察灯における総誘殺数は平年並。水田すくい取り調査の発生量は、7月上旬・8月上旬ともに平年並であった。	気温が平年よりもかなり高く推移したが、発生量は平年並で推移した。
斑点米カメムシ類（ホソヘリカメムシ、クモヘリカメムシ、アカヒゲホソドリカメムシ、アカスジカメムシ）	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	水田すくい取り調査における主要4種の合計は7月、8月ともに平年並であった。フェロモントラップによるクモヘリカメムシの誘殺数は場所によりばらつきがあるが、平年並であった。	3月以降気温が高く推移し、主要4種の活動に好適な条件であったが、調査では平年並の発生であった。県南部ではイネカメムシが多発し、被害を発生させた。
コブノメイガ	平年：- 前年：-	平年：少 前年：並	予察灯及び水田すくい取り調査で本虫の誘殺は見られなかった。	本県への飛来は少なかった。
イネミズソウムシ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	令和6年2月の越冬密度調査の成虫密度、5月下旬のほ場調査ともに平年並の発生であった。	平年並の発生であった。
イネドロオウムシ	平年：- 前年：-	平年：並 前年：並	5月下旬のほ場調査では発生ほ場数は少なく、8月上旬の発生程度は平年並。	気温は高く推移し、発生には適さない条件であった。
イネツトムシ（イチモンジセセリ）	平年：- 前年：-	平年：やや少 前年：並	水田すくいとり調査では、7月は少なく、8月はやや少なかった。ほ場調査では、7月上旬は少なく、8月上旬はやや少ない発生量であった。	適切な防除が行われたため、本県での発生は少なかった。
イナゴ類	平年：- 前年：-	平年：並 前年：並	水田すくいとり調査では、7、8月ともに平年並であった。	
フタオビコヤガ	平年：- 前年：-	平年：やや多 前年：並	予察灯ではごくわずかに誘殺された。水田すくいとり調査では8月にごくわずかに確認された。	
イナズマヨコバイ	平年：- 前年：-	平年：並 前年：並	予察灯における総誘殺数は平年並。水田すくいとり調査では、7月は平年並、8月は多かった。	気温が平年よりもかなり高く推移したが、発生量は平年並で推移した。

(2) 麦

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
さび病類	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：並	定点調査での発生は見られなかった。	昨年も発生は確認されず、伝染源は少なかったと推定される。
うどんこ病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：並	5月に一部のほ場で発生が見られた。	適切な防除により発生が抑えられた。
赤かび病	平年：－ 前年：－	平年：多 前年：やや多	5月上旬には小麦、二条、六条とも発生が見られ発生ほ場率は近年では最多であった。5月下旬には小麦、六条の発生ほ場率は9割になった。	4～5月の気温は高く周期的に降雨があり、感染・発病に適していた。
黒節病	平年：－ 前年：－	平年：やや多 前年：やや多	主に二条大麦をに発生が見られ、5月には減少した。	4月の一時的な大雨が発生を助長した。
縞萎縮病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：少	大麦縞萎縮病では3月の発生ほ場率は平年並であった。	11～2月が高温で推移したため平年並の発生になった。
斑葉病	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：やや少	4月下旬に県南部の一部で発生が見られた。	11月が高温であったため幼苗の感染が抑えられた。

(3) 大豆

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
紫斑病	平年：－ 前年：－	平年：やや多 前年：並	生育期の莖葉における発生は確認されなかった。子実への被害粒発生はやや多かった。	前年の発生がやや多かったため、被害残渣が伝染源となり、やや多い発生となったと推察される。
べと病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	生育期の莖葉における発生は平年並からやや多で推移した。子実への被害粒発生はやや多かった。	「里のほほえみ」はべと病に感染しやすいが、発病に好適な冷涼・多雨条件ではなかったため、発生は平年並であった。
アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	ほ場における発生は、8月はやや多かったが、9月は平年並であった。	適切な防除により、農作物被害はやや少なかった。
ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺数は、地点によりばらつきはあるが、平年並であった。ほ場における発生はやや少なかった。	適切な防除により、農作物被害はやや少なかった。
吸実性カメムシ類	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	フェロモントラップによるホソヘリカメムシの誘殺数は、地点によりばらつきはあるが平年並。ほ場における発生は9月にやや多かった。	秋の高温等の影響により、平年より遅い時期までほ場で確認された。
シロイチモジヨトウ	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：並	定点調査での発生は見られなかった。	
マメシクイガ	平年：－ 前年：－	平年：やや多 前年：やや多	子実調査では、被害粒の発生はやや多かった。	気温が高めに推移するなど、発生量が多かったと推察される。
フタスジヒメハムシ	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	ほ場調査では、8月は平年並、9月はやや多かった。子実調査では、被害粒の発生は平年並であった。	気温が高めに推移するなど、ほ場での発生量はやや多かったが、適切な防除が実施された。
コガネムシ類	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	ほ場調査では、8、9月ともに少なかった。予察灯におけるオオクロコガネの総誘殺数は少なかった。	気温が高めに推移するなど、発生量が多かったと推察される。
シロイチモジマダラメイガ	平年：－ 前年：－	平年：多 前年：多	子実調査では、被害粒の発生は多かった。	気温が高めに推移するなど、発生量が多かったと推察される。

2) 野菜

(1) いちご (親株・育苗床)

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
炭疽病	平年:- 前年:-	平年:多 前年:多	6~9月の調査期間を通じて発生が見られた。	6月からの高温により、灌水が増え、水滴の跳ね上がりにより二次伝染が増加したと考えられる。
萎黄病	平年:- 前年:-	平年:並 前年:やや多	7月に一部地点で発生が散見された。	無病苗を利用することにより、育苗期での発生は抑えられていた。
灰色かび病	平年:- 前年:-	平年:少 前年:並	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除やほ場管理により発生が抑えられた。
うどんこ病	平年:並 前年:並	平年:平年並 前年:やや多	6~7月にやや少ない~平年並の発生が見られた。	一部の軟弱徒長、過密になっている親株で梅雨により多く発生した。
アブラムシ類	平年:並 前年:並	平年:並 前年:やや多	おおむね平年並の発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
ハダニ類	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	おおむね平年並の発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
コナジラミ類	平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:やや少	おおむねやや少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。

いちご (本ぼ)

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
炭疽病	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	10~3月の調査期間を通じて発生が見られた。	潜在的な感染株があり、除去が遅れた。
萎黄病	平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:やや少	11月、2月に発生が見られた。	適切な防除により発生が抑えられた。
灰色かび病	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	2、3月に発生が見られた。	一部の薬剤で感受性の低下が認められ、発生が見られた。
うどんこ病	平年:- 前年:-	平年:多 前年:多	3月に発生が多く見られた。	3月の日照不足と高温で軟弱徒長しやすい気象条件下にあったことや、作の後半で過繁茂になったことが要因と考えられる。
アブラムシ類	平年:並 前年:並	平年:やや多 前年:並	おおむねやや多い発生で推移した。	近年、ハダニ類天敵の普及によって全体的な薬剤散布回数が減っており、ほ場における発生が目立つ傾向にあった。
ハダニ類	平年:並 前年:並	平年:並 前年:やや少	おおむね平年並の発生であった。	大半のほ場でカブリダニ等の天敵利用が行われている。近年は天敵利用技術の向上により導入が安定し、多発生が少ない傾向にあった。
コナジラミ類	平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:やや少	おおむねやや少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
アザミウマ類	平年:やや早い 前年:やや早い	平年:やや多 前年:やや多	おおむねやや多い発生であった。	開花時期の早い品種の増加や、秋の気温がなかなか下がらないこと等によって、秋の施設への侵入量と越冬量が増加していると考えられる。
シロイチモジヨトウ	平年:- 前年:-	平年:少 前年:-	全般的に平年より少ない発生であった。	他のチョウ目害虫に対する定期的な薬剤散布により、被害が抑えられた。一方で、他の作物種では被害が増加しているため、状況を注視する。

(2) 夏秋トマト

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
疫病	平年:- 前年:-	平年:少 前年:少	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
灰色かび病	平年:- 前年:-	平年:やや多 前年:多	7月のみ一部ほ場で発生が見られた。	適切な防除により発生が抑えられた。
葉かび病	平年:並 前年:並	平年:並 前年:少	6~7月に一部ほ場で発生がみられたが、おおむね平年並の発生であった。	抵抗性品種の導入が進んでいるが、一部ほ場で罹病性品種が栽培されている。
モザイク病	平年:- 前年:-	平年:少 前年:並	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
黄化葉巻病	平年:- 前年:-	平年:やや多 前年:多	7~8月に一部ほ場で発生がみられ、やや多い発生であった。	黄化葉巻病耐病性品種が増加したが高温条件下では抵抗性が崩壊し、発病が見られた。
青枯病	平年:- 前年:-	平年:少 前年:-	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
萎ちよう病	平年:- 前年:-	平年:少 前年:-	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
すすかび病	平年:- 前年:-	平年:並 前年:並	全般的に平年並の発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
うどんこ病	平年:- 前年:-	平年:並 前年:多	7~8月に一部ほ場で発生がみられたが、おおむね平年並の発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
アブラムシ類	平年:並 前年:遅い	平年:やや少 前年:並	8月に一部ほ場で発生がみられたが、おおむねやや少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
アザミウマ類	平年:並 前年:並	平年:並 前年:多	7月に一部ほ場で発生がみられたが、おおむね平年並の発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
コナジラミ類	平年:並 前年:並	平年:多 前年:多	おおむね多い発生であった。	トマト黄化葉巻病耐病性品種の増加により、コナジラミ類に対する防除圧が低下していることが一因と考えられる。
ハモグリバエ類	平年:やや遅い 前年:並	平年:並 前年:並	7~8月に一部ほ場で発生がみられたが、おおむね平年並の発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
タバコガ類(オオタバコガを除く)	平年:- 前年:-	平年:並 前年:-	7~9月に一部ほ場で発生がみられたが、おおむね平年並の発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。

(3) 冬春トマト

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
疫病	平年：- 前年：-	平年：並 前年：多	10月のみ一部ほ場で発生が見られた。	適切な防除により発生が抑えられた。
灰色かび病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや多	12～3月に発生が見られ、おおむね平年並の発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
葉かび病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：少	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
モザイク病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：少	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
黄化葉巻病	平年：並 前年：並	平年：多 前年：並	2024年10月以降の新植株において発生が多かった。	TYLCV耐病性品種の増加に伴い、媒介虫であるタバココナジラミの防除圧が低下したことで発生が増加している。
すすかび病	平年：- 前年：-	平年：多 前年：やや多	10～2月に発生が見られ、平年より多い発生であった。	10月になっても高気温の傾向が続き好適条件となったため、発生量が増えた。また、トマト葉かび病抵抗性品種の普及に伴い、葉かび病を対象にこれまで使用していたすすかび病にも効果のある農薬の使用が減少したため、発生が増えたと考えられる。
うどんこ病	平年：- 前年：-	平年：多 前年：多	12～3月に発生が見られ、平年より多い発生であった。	3月に気温の上昇とともに発生が増加した。
青枯病	平年：- 前年：-	平年：やや多 前年：-	11月のみ一部ほ場で発生が見られた。	適切な防除により発生が抑えられた。
萎ちょう病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：-	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
アブラムシ類	平年：並 前年：-	平年：やや少 前年：-	一部ほ場で散発的な発生がみられたが、おおむねやや少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
アザミウマ類	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	全般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
コナジラミ類	平年：早い 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	春先はおおむね平年並の発生であったが、2024年10月以降の新植株においてやや多かった。	トマト黄化葉巻病耐病性品種の増加により、コナジラミ類に対する防除圧が低下していること、夏期のコナジラミ類の密度が高かったこと(夏秋トマトでも発生量が多かった)等が要因と考えられる。
ハモグリバエ類	平年：やや早い 前年：並	平年：並 前年：やや多	2024年10～11月に一部ほ場で散発的な発生がみられたが、おおむね平年並の発生であった。	一部ほ場で発生がみられたが、適切な防除により被害発生が抑えられた。
タバコガ類(オオタバコガを除く)	平年：- 前年：-	平年：少 前年：-	全般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。

(4) 夏秋なす

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
うどんこ病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	6～8月はおおむね少ない発生であったが、9月はやや多い発生であった。	生育が進み、密植繁茂したほ場で発生が見られた。
灰色かび病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：並	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
半身萎凋病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：並	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
青枯病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや少	8月に一部ほ場で発生がみられた。	発生ほ場での土壌中の菌密度が高まっていたと考えられる。
すすかび病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
ハダニ類	平年：やや早い 前年：並	平年：並 前年：やや少	おおむね平年並の発生であった。	春から秋にかけて気温の高い状態が続き、4～7月は降水量も平年並～少ない状態が続いたため、発生量が多くなった。
アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや多	おおむね平年並の発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
アザミウマ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	おおむね平年並の発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
シロイチモジヨトウ	平年：- 前年：-	平年：少 前年：-	全般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
コナジラミ類	平年：- 前年：-	平年：やや多 前年：-	9月の発生はやや多かった。	春から秋にかけて気温の高い状態が続き、4～7月は降水量も平年並～少ない状態が続いたため、発生量が多くなった。
タバコガ類(オオタバコガを除く)	平年：- 前年：-	平年：多 前年：-	6月から発生が認められ、9月にかけて発生が多かった。	春から秋にかけて気温の高い状態が続き、4～7月は降水量も平年並～少ない状態が続いたため、発生量が多くなった。
ハモグリバエ類	平年：- 前年：-	平年：多 前年：-	おおむね発生が多かった。	春から秋にかけて気温の高い状態が続き、4～7月は降水量も平年並～少ない状態が続いたため、発生量が多くなった。

(5) 夏秋きゅうり

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
べと病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：並	6～7月の発生はやや多かった。	6月から高温多湿となった日が多く、発生が目立った。
うどんこ病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	おおむね平年並の発生であった	適切な防除により発生が抑えられた。
褐斑病	平年：－ 前年：－	平年：多 前年：並	6月に発生が多く見られた。	6月から高温多湿となった日が多く、発生が目立った。
疫病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：並	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
黄化えそ病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
炭疽病	平年：－ 前年：－	平年：やや多 前年：やや多	散発的に発生が見られた。	適切な防除により発生が抑えられた。
斑点細菌病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
モザイク病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：－	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
ハダニ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：やや少	散発的に発生が見られたが、適宜防除により被害拡大は抑えられた。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
ハモグリバエ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	おおむね平年並の発生であったが、9～10月に発生が増加した。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	散発的に発生が見られたが、適宜防除により被害拡大は抑えられた。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
コナジラミ類	平年：－ 前年：－	平年：やや多 前年：並	おおむねやや多い発生であった。	栽培初期に侵入した個体がハウス内に残存し、だんだんと発生が続いた。
アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：やや多	散発的に発生が見られたが、適宜防除により被害拡大は抑えられた。	適切な防除により被害発生が抑えられた。

(6) 冬春きゅうり

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：並	3月に一部地点で発生が見られた。	適切な防除により発生が抑えられた。
べと病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	10～3月の期間全体を通して発生が見られた。	秋季まで高温が続き、病害が発生しやすい気象条件下にあった。
うどんこ病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	10～3月の期間全体を通して発生が見られた。	秋季まで高温が続き、病害が発生しやすい気象条件下にあった。
褐斑病	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	10～3月の期間全体を通して発生が見られた。	秋季まで高温が続き、病害が発生しやすい気象条件下にあった。
疫病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：並	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
黄化えそ病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：多	12～2月の厳寒期は発生が見られなかったが、9～10月と3月は発生が見られた。	外部からのアザミウマ類の侵入により発生した。
炭疽病	平年：並 前年：並	平年：多 前年：多	11～2月に発生が見られた。	例年、発生が見られるほ場や露地栽培で発生した。
斑点細菌病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：少	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
モザイク病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：－	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
ハダニ類	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	全般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
ハモグリバエ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：やや多	おおむねやや少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：やや少 前年：並	おおむねやや少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
コナジラミ類	平年：－ 前年：－	平年：やや多 前年：並	おおむねやや多い発生であった。	薬剤感受性が低下した生存個体が施設内で越冬し、春先の気温上昇に伴い増加した。
アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：やや多 前年：やや少	散発的な発生がみられたが、全般的にやや少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。

(7) なら

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
乾腐病	平年：－ 前年：－	平年：多 前年：多	12～3月に平年並～やや多い発生が見られた。	昨年、発生が見られたほ場で、土壌中の病原菌密度が高まり、発生が増加した。
白斑葉枯病	平年：－ 前年：－	平年：並 前年：並	11～12月に一部地点で発生が見られた。	適切な防除により発生が抑えられた。
さび病	平年：－ 前年：－	平年：やや多 前年：多	全般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
ネダニ	平年：並 前年：並	平年：やや少 前年：やや少	期間を通じ一部ほ場で発生が見られたが、発生量としては全般的にやや少ない発生であった。	同一ほ場で長年にわたり作付されており、発生しやすい環境となっていた。
アザミウマ類	平年：－ 前年：－	平年：やや多 前年：－	12～2月にかけてやや多い発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。

(8) 秋冬ねぎ

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
さび病	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	7月に発生は平年並であったが、8月以降は少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
べと病	平年:並 前年:並	平年:やや多 前年:やや多	7月にやや多い発生がみられたが、それ以降は発生が無かった。	適切な防除により発生が抑えられた。
黒斑病	平年:並 前年:並	平年:やや多 前年:やや多	7～10月の期間全体を通して発生が見られた。	10月まで高温が続いたため発生が見られた。
萎縮病	平年:- 前年:-	平年:少 前年:並	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
軟腐病	平年:- 前年:-	平年:平年並 前年:-	7～9月は発生は見られなかったが、10月は平年並の発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
葉枯病	平年:- 前年:-	平年:やや多 前年:-	7～10月の期間全体を通して発生が見られた。	10月まで高温が続いたため発生が見られた。
アブラムシ類	平年:- 前年:-	平年:少 前年:-	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
アザミウマ類	平年:並 前年:並	平年:やや少 前年:並	おおむね平年並の発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
ハモグリバエ類	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	おおむねやや多い発生であった。	一部ほ場において、B系統が多発し、集団加害による白変葉が目立った。
ネギコガ	平年:- 前年:-	平年:少 前年:-	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
シロイチモジトウ	平年:早い 前年:早い	平年:多 前年:やや多	おおむね多い発生であった。	本種の被害は、昨年は県南部が中心であったが、本年は県全域に拡大している。

(9) たまねぎ

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
さび病	平年:- 前年:-	平年:少 前年:並	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
べと病	平年:並 前年:並	平年:多 前年:多	3月に発生が多く見られた。	昨年、発生の多かったほ場での連作により、1次感染株の発生が増加した。
白色疫病	平年:- 前年:-	平年:少 前年:並	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
黒斑病	平年:- 前年:-	平年:少 前年:並	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
灰色かび病	平年:- 前年:-	平年:少 前年:-	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
ボトリチス属菌による葉枯病	平年:- 前年:-	平年:少 前年:-	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により発生が抑えられた。
アザミウマ類	平年:並 前年:並	平年:やや多 前年:やや多	おおむねやや多い発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
アブラムシ類	平年:- 前年:-	平年:平年並 前年:-	おおむね平年並の発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
ネギハモグリバエ	平年:- 前年:-	平年:少 前年:-	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。

(10) 冬キャベツ

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
黒腐病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	全般に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
菌核病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	全般に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
モンシロチョウ	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	全般に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	全般に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
ヨトウガ	平年：早い 前年：－	平年：多 前年：多	9月の発生は多かったが、10月は少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
ヨトウムシ類(指定有害を除く)	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：－	全般に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。

(11) あぶらな科野菜

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：－	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
コナガ	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：－	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。

(12) 冬レタス

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
灰色かび病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：並	全般に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
菌核病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：並	全般に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
軟腐病	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：少	全般に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
アブラムシ類	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：－	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
ヨトウガ	平年：－ 前年：－	平年：少 前年：－	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
シロイチモジトウ	平年：－ 前年：－	平年：多 前年：多	10月の発生は多かった。	一部ほ場において、被害の発生がみられた。

(13) 野菜共通

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
ハスモンヨトウ	平年：並 前年：並	平年：並 前年：並	フェロモントラップによる誘殺数は一般的に平年並となったが、10月以降は誘殺数が増加傾向にあった。	秋に高温傾向が続いたため、晩秋まで活動が継続し、一部作物では被害がみられた。
オオタバコガ	平年：早い 前年：早い	平年：多 前年：多	5月頃から誘殺がみられ、8月頃まで平年より多い状態で推移した。	春から夏にかけての多発により、露地なす等で平年より多くの被害が認められた。

3) 果樹
(1) なし

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
黒斑病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：並	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
黒星病	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや多	平年並の発生であったが、一部のほ場では5～6月に果実への発生が見られた。	適切な防除が行われたため発生が抑えられた。
赤星病	平年：並 前年：並	平年：やや多 前年：やや多	6月以降、県南部のほ場を中心に発生した。	一部の菌密度の高いほ場で発生した。
アブラムシ類	平年：並 前年：並	平年：並 前年：やや多	5月以降に発生がみられ、8月にはやや多かった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
ハダニ類	平年：やや早い 前年：やや早い	平年：やや多 前年：多	6月以降に発生がみられ、7～8月は多い発生となった。	多発要因は、カメムシ類の多発に伴う、殺虫剤散布回数増加によるリサーチェンスと考えられる。
シンクイムシ類	平年：やや早い 前年：並	平年：やや多 前年：並	フェロモントラップにおける発生時期はやや早く、発生量はやや多かったが、ほ場における被害は少なかった。	春から秋にかけて気温の高い状態が続き、降水量も4～7月までは平年並からやや少なくなかったため、発生量が多くなった。
ハマキムシ類	平年：- 前年：-	平年：- 前年：-	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
カイガラムシ類	平年：- 前年：-	平年：- 前年：-	定点調査での発生は見られなかった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。

(2) ぶどう

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
晩腐病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：並	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
べと病	平年：やや遅い 前年：並	平年：やや少 前年：並	8月に発生が見られたが、一般的にやや少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
灰色かび病	平年：並 前年：並	平年：少 前年：並	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
黒とう病	平年：やや遅い 前年：-	平年：少 前年：並	8月に一部で発生が見られたが、一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
ハマキムシ類	平年：- 前年：-	平年：少 前年：少	フェロモントラップでの誘殺は認められず、一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
アザミウマ類	平年：- 前年：-	平年：- 前年：-	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
アブラムシ類	平年：- 前年：-	平年：- 前年：-	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
ハダニ類	平年：- 前年：-	平年：- 前年：-	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。

(3) りんご

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
斑点落葉病	平年：早 前年：並	平年：多 前年：並	6月に発生が認められ、9月にかけて増加した。	昨年多発したため感染源が多く、高温のため増加した。
黒星病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：-	ほとんど発生していない。	適切な防除により発生が抑えられた。
赤星病	平年：- 前年：-	平年：少 前年：並	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により発生が抑えられた。
輪紋病	平年：並 前年：やや早い	平年：やや多 前年：並	9月以降に発生が見られた。	適切な防除により発生が抑えられた。
褐斑病	平年：やや早い 前年：やや早い	平年：やや多 前年：並	6月から発生が認められ、9月にかけて増加した。	昨年の発生で感染源がやや多く、6月の多雨が発生を助長した。
ハダニ類	平年：- 前年：-	平年：やや少 前年：並	8月以降に発生が見られた。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
アブラムシ類	平年：- 前年：-	平年：並 前年：やや多	8月以降に発生が見られた。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
シンクイムシ類	平年：- 前年：-	平年：- 前年：-	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
ハマキムシ類	平年：- 前年：-	平年：- 前年：-	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。

(4) 果樹共通

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
カメムシ類	平年：早い 前年：早い	平年：多 前年：多	フェロモントラップによる誘殺数は一般的に多く、なし、りんごの定点調査において被害果実が認められた。	前年の越冬世代発生量が多く、冬期が温暖に推移したため越冬虫数が多かったと考えられる。また、春先の気温が高く推移したことで発生時期が早まり、フェロモントラップでは5月上旬から誘殺が認められた。

4) 花き
(1) きく

病害虫名	発生時期	発生量	発生過程の概要	発生原因の解析
白さび病	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	1月に多く発生した。	適切な防除により初期段階で発生が抑えられた。
アブラムシ類	平年:並 前年:並	平年:やや多 前年:やや多	散発的に発生が見られたが、適宜防除により被害拡大は抑えられた。	一部ほ場において、防除の合間に発生が見られたものの、被害は限定的であった。
アザミウマ類	平年:並 前年:並	平年:並 前年:やや多	おおむね平年並の発生であった。	適宜防除が行われたが、残存個体が継続的に発生した。
ハダニ類	平年:並 前年:並	平年:並 前年:並	おおむね平年並の発生であった。	適宜防除が行われたが、残存個体が継続的に発生した。
ハスモンヨトウ	平年:- 前年:-	平年:少 前年:-	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。
シロイチモジヨトウ	平年:- 前年:-	平年:少 前年:-	一般的に少ない発生であった。	適切な防除により被害発生が抑えられた。